

# 読書感想文入賞作品

『永遠の0』 百田尚樹 著

## 戦争の実態

－「永遠の0」を読んで

電気工学科1年 堀口 颯馬

「娘に会うまでは死ねない、妻との約束を守るために」。そう言い続けた男はなぜ自ら命を落としたのか。終戦から60年目の夏。健太郎は死んだ祖父の生涯を調べていた。天才だが臆病者。想像と違う人物像に戸惑いつつも、一つの謎が浮かんでくる。記憶の断片が揃う時、明らかになる真実とは

この内容紹介に興味を持ち、僕は「永遠の0」という本を手に取りました。

「永遠の0」という本は、人生の目標を失いかけていた青年・佐伯健太郎とフリーライターの姉・慶子が、太平洋戦争で特攻に志願し戦死した祖父・宮部久蔵について調べ始めることから物語が始まります。物語が進むにつれて元戦友たちの証言から浮かび上がってきた宮部久蔵という人物は、戦闘機乗りとして凄腕を持ちながら、異常なまでに死を恐れ、生に執着する男でした。僕は妻を愛し、「生きて帰る」という約束にこだわり続けた宮部がなぜ特攻に志願したのかとても不思議に思いました。しかし、物語を読み進めていくと宮部が特攻に志願した理由がなんとなく理解できました。宮部久蔵という人物は、何よりも命を大切にす人物でした。それは、戦闘機乗りの時に部下に言った「どんなに苦しくても生き延びる努力をしる」という言葉や、特攻隊員の教官の時に教え子が上達していくことを辛そうにしていたことからよく分かりました。しかし、宮部は飛行機乗りとして、教官として多くの部下や教え子を死地へ送らなければなりません。宮部が何よりも命を大切にす人物だからこそ、自分の存在に悩み苦しんだのだと思います。特攻隊に志願したのは、悩み苦しんだはてに自分の死をもって残された人達に希望を託そうとしたからなのだと思います。

この本を読んで、僕は戦争の悲惨さを再認識しました。それはこの本が戦争という時代に巻き込まれた青年達的心情を描写しているからです。心の中で「生きたい」と思っても、それを口に出せない時代の空気。絶望的な状況で無意味と思える作戦でも、上官の命令に逆らえないために命を捨てなくてはならない軍人達。特攻隊員の自分が死ぬことへの恐怖や、家族や恋人への思い。それらの全てが生々しく描かれています。僕は今まで志願制である特攻隊は、

愛国心に溢れ命も惜しまない軍人が行っていたのだと思っていました。しかし、実態は志願制とは名ばかりで、命令と同じようなものだったと分かったときは、とても衝撃を受けました。特攻隊ですら戦争という時代に巻き込まれ、悲しい末路を辿った人達の一部であり、その上絶対に死ぬということが決まっていた彼らは、この戦争の一番の被害者だったのではないかと思いました。彼らのような被害者を増やさないためにも、僕達はこの世界の平和を守っていかねばならないと思いました。

『永遠の0』 百田尚樹 著

## 零と出会う

電子制御工学科1年 粟生 小百合

私がこの本を読んだのは、姉に感動したからぜひ読んでみてはと薦められたからだ。読み進めていくと興味深く、沢山のことを考えさせられた。

この物語は、主人公とその姉が特攻隊で亡くなった祖父の生涯について知るために、祖父のかつての戦友たちを訪ね、調べていく話である。初めに訪ねた人によると祖父は臆病者ということであった。しかし、調査を続けるうちに実は祖父は腕の立つパイロットだが、軍人らしくない人だったということが分かった。階級制度が厳しい軍隊の中で部下に対しての言葉づかいが丁寧で優しくかった。さらに、「娘に会うまでは死ねない、妻との約束を守るために。」と言い続けた。天皇のために死ぬことが正義とされていた時代に周りの目を気にせず自分の意見を曲げない祖父は本当はとても強かったのではないだろうか。

また、調査を進めていくうちに、この戦争がどれだけ無謀だったのかも分かった。ガダルカナル島での陸軍の戦いは、場当たりの作戦だったため、兵士達が将棋の駒のように使われた。軍の中核は敵情偵察もろくにせず、実際は一万三千人いた米軍の兵力を二千人とみて、わずか九百人あまりの部隊を送り込んだのだ。また、日本陸軍は銃剣突撃が基本の戦法だったのに対し、米軍は重砲や重機関銃と軽機関銃を用いた戦法だった。こんなの勝てるはずがない。陸軍の中核は何を考えていたのだろうか。桜花も無謀な作戦だった。桜花とは人間が操縦するロケット爆弾のことだ。自力で飛び出すこともできず、着陸することも出来ない。旋廻も出来ず、ただ真っ直ぐに滑空する。一式陸攻に懸吊され、上空から敵に向かって飛んで行くだけの人間ロケットだ。

このように軍部は兵隊の命を何とも思っていなか

ったのだ。特攻隊はまさにその典型である。うまくいけば一人の人間と一機の戦闘機で軍艦を一隻沈めることができるかもしれない。その一発命中のために数十人の命が無駄になることは仕方がないと考えられていた。なんて酷いのだろう。

さて、タイトルの0は零戦のことである。戦争が始まったころ世界で零戦と互角に戦える戦闘機はまだなかった。格闘性能がずば抜けている上にスピードが速い。さらに航続距離も桁外れだった。当時の単座戦闘機の航続距離は大体数百kmだったのに対して零戦は三千kmを楽々と飛んだ。零戦を作ったのは堀越二郎と曾根嘉年である。彼らは戦争のために飛行機を作ったわけではない。しかし、戦争で使われ、多くの命を奪う結果となった。どんなに素晴らしい技術でも使い方によっては殺人兵器になってしまう。例えば原子力発電所もそうではないか。私も技術者になりたいと思っている。技術を追求するのは大切だが、その技術が本当に人の幸せに貢献できるかまで考えなければならぬと深く感じた。

この本を読むまで、私は特攻隊も含め、戦争がこんなに悲惨だと知らなかった。言いたいことも言えず、将棋の駒のように命が奪われていく戦争は恐ろしいと思う。そんな時代の中で生きたいと主張し続けた主人公の祖父は本当に信念が強い。今、中国や韓国から日本は歴史認識が間違っていると指摘され、国交がうまくいっていない。私達は今こそ過去の戦争と真剣に向き合い、学び続け、自分の意思を固める努力をしなければならない。

歌え！多摩川高校合唱部 本田有明 著

## 部活での経験とは

—「歌え！多摩川高校合唱部」を読んで—

情報工学科1年 林 大泰

この話の舞台となる多摩川高校は神奈川県有数の進学校。部活動は運動・文化部ともに盛んで、合唱部は2年に一度は県代表として関東大会に出場するほどだ。主な大会は、NHK 全国学校音楽コンクール（通称：Nコン）であり、今年度はそのNコンに力を入れる理由があった。

その理由とは、この春卒業していった合唱部の平峰千晶が応募した詩「あしたはどこから」がNコンの課題曲に選ばれたからだ。昨年度、多摩川合唱部はNコンで予選敗退していた。その後、昨年度の3年生最後の機会である定期演奏会で「あしたはどこから」を歌い、当時の2年生たちは自分たちが先輩たちの「あしたはどこから」を受け継ぎ大切に

歌っていくんだと心に誓ったのだった。

そしてこの本の話は、新一年生たちが合唱部に出会うところから始まる。合唱部としては抜けた3年生の穴を埋めるのもあるが、現在部員24人（内男子4人）の中で、男女混声合唱を維持するためにも男子を獲得することが最優先事項だった。そして勧誘の結果、21人（うち男子7人）が入り、とりあえず合唱部としての人数は揃ったのであった。

しかしその1年生たちは先輩から「宇宙人」と呼ばれるほどにこれからどんなことになるかわからないメンバーが揃い、そんな1年生に優しく接するも不安やプレッシャーを感じている2年生、昨年度の経験から強い覚悟を持つ3年生たちの合唱部が、Nコンに向けて活動していくのだった。

私はこの本の中で、新入部員である乙川光太の「重い読書体験」について深い印象を受けた。乙川が先輩の錦野ユカリに紹介された「ばら・きく・なずな」という楽曲の作曲者、星野富弘さんの詩画集「四季抄 風の旅」（立風書房）という本を読み、その曲の本質について読み解いていく場面だ。

乙川はこの本を読み、作者は大怪我をして体の自由を失い、9年間もの入院生活の中でこうした絵を口で書けるようになったことを知る。さらに「神様がたった一度だけ この腕を動かしてくださるとしたら 母の肩をたたかせてもらおう…」という詩の部分に強い思いが込められていることを感じたのであった。そして乙川は「その人の作品を、ぼくたちは音楽にのせて歌うことができる。それは当たり前のようにもあるけれど、よく考えてみると、なにかものすごい奇跡でもあるような感じ。」と、本を通して詩に込められた思いを純粋に感じ取り、歌えることの素晴らしさを改めて実感したのである。同じように他の部員たちもそれぞれの強い思いを持って合唱に打ち込んでいくのだった。

私にはこの合唱部で過ごしたことが部員たちにとって、人生において「重い体験」になっているだと伝わってきた。後日談の中でも、高校時代という青春の中で得た経験がその後、かけがえのない大切なものとなっているのがひしひしと感じ取れた。

高校時代に部活動に打ち込むことはとても大切だと思う。私は現在運動部に所属し、それに打ち込んでいるが、文化部というものにそれほどの思いは感じなかった。だが、この本を読んで文化部に対する考えも変わった。たとえ運動部、文化部どちらであろうと、そこで出会う仲間や経験はかけがえのないものであり、違いは無いのだと考えるようになった。結局、純粋に部活に打ち込むほど、後に人生を語る上で大切な「重さ」になるのだと思う。私もこれからはそのことを意識して部活に打ち込むつもりだ。



鉄道員 浅田次郎 著

## すべてを捧げる仕事

— 鉄道員を読んで —

物質化学工学科1年 大西 朝登

幸せな最期だったと僕は思う。娘にも妻にも先立たれ、人生を共にしてきた幌舞線もとうとう廃線が決まってしまった。それでも乙松の最期は幸せだったろうと僕は思う。何一つ後悔はなかったと思う。

四十五年間、乙松はポッポヤとして生きてきた。そして、乙松はその間、決して涙を流さなかった。集団就職の子どもたちを自分の駅から送り出したとき、死んだ娘が自分の電車で帰ってきたとき、仕事のために妻を看取れなかったとき。どんなにつらいことがあっても彼は、ポッポヤが泣くわけにはいかんべ。と言って涙をこらえた。

なぜポッポヤは泣いてはいけないんだろうか。もし僕なら、彼のように涙をこらえることは絶対にできないと思う。僕は、ポッポヤという仕事は自分を殺さなければ務まらないほど厳しい仕事なのだろうかと疑問に思った。でも、傍から見れば、鉄道員の仕事はそんなに大変そうには見えない。僕は今まで、鉄道員の仕事は、電車が来れば誘導し、また送り出す。ぐらいのことだと思っていた。でももしポッポヤの果たすべき仕事がそれだけだったら、乙松も、仕事のために涙を流さないなんてことはしなかっただろう。でもポッポ乙松の仕事は僕が想像していたようなものではなかった。雨の日も雪の日も一人ホームで通学生を送り迎えしたり、そして雪のように冷たくなってしまった娘を自分の電車で迎えたこともあった。そんな仕事は半端な気持ちでは決して務まらない。だから乙松は涙を流すことさえやめてしまったんだと思う。

乙松は仕事を愛し、仕事に身を捧げた。だからその分、心の中には家族に対する後ろめたさがあったと思う。でもそんな気持ちは、ユッコとの再会でときほぐされていった。半世紀ものポッポヤ人生の思い出話を娘に聞かせてやれたこと、そして娘との再会、交わした言葉。それらが、彼の背中にまるで体の一部のようにへばりついてきた「ポッポヤ」という重たい荷物をおろさせてくれたのではないだろうか。ユッコが「もういいよ。お父さん。おつかれさま。」と言ってくれているような気がする。ユッコは、父を楽にさせてあげるために、やってきたのだろう。乙松は、やっと涙をこぼすことができ、幸せだったと思う。

僕はこの本を読んで「ポッポヤ」になりたいと思った。鉄道員になりたいということではなく、自分の全てを捧げられるような仕事をしたいと思えるようになった。僕はまだ高専の一年生だから、将来の仕事のことはまだおぼろげにしかわからない。でも「ポッポヤ」になるという目標は、これから持ち続けたいと思う。そして、少し欲張り過ぎかもしれないけど、できることなら佐藤乙松のように他人を思いやり、思いやられながら生きたい。そして彼のように「そこらの偉もんの葬式とはわけがちがう」、みんなに愛されながら見送られる葬式をあげてもらうことができれば、どんなに素晴らしいだろうと思った。

累計障害者 獄の中の不条理 山本譲司 著

## 障害者福祉のあり方

情報工学科2年 宮本 靖貴

テレビ等のマスメディアにおいて、障害に負けず仕事を頑張る障害者、芸術活動に才能を発揮する障害者、パラリンピックに出場し優秀な結果を残す障害者など多くの努力する障害者がしばしば取り上げられている。しかし一方で、問題行動を起こす障害者がいるのも事実である。この本はそんな障害者の中でも特に犯罪を犯した障害者たちの実情を紹介し、解決策を模索している。

まず私が驚いたことは、犯罪を犯した障害者のほとんどが同じような罪を何度も繰り返し、何度も服役していることだ。その理由は、彼らにとって刑務所は外の世界よりも暮らしやすいからというものである。出所しても福祉サービスを受けることが出来ず、浮浪者となりまた罪を犯す、この悪循環から抜け出せないのだ。健常者であれば未だ十分とは言えないが更生施設などで補助を受けることができるというのは大変な問題だと考える。また、そもそも犯罪に手を染める原因となった一部には福祉の対応の不十分さがあり、日本の障害者に対するサポートは早急に充実したものにしていけることが重要だ。

現在の社会においての居場所の少なさによって、障害者の中には売春婦やヤクザとして生きている者がいることにも驚いた。本文に出てきた知的障害の売春婦が、「障害者はね、好きな人ができて本気で付き合っても、すぐにバカがばれて捨てられちゃうの。でも私を抱いてくれた男の人はみんな優しくった。」と嬉しそうに語る場面から、それら彼女に

とっての「生きがい」になっていたであろう事実は、あまりにも切なすぎる。また、ヤクザ組織に身を置く知的障害者が、「俺よー、今めっちゃ楽しいんだ。周りには俺と同じようにムシヨ上がりがいっぱいいるし、組の兄貴たちにも可愛がってもらってるし。」と刑務所にいたときよりも生き生きと話す場面があり、彼にとってそこは生まれて初めて見つかった自分自身の居場所なのかもしれないと思うとあまりに哀れである。路上生活、閉鎖病棟への入院など適切な福祉を受けられない障害者らの現実には悲惨なものであった。

冒頭で述べたように、努力する障害者をメディアは取り上げるのだが、犯罪を起こしたりした事実はタブーとして隠蔽する。多くの福祉関係者は、近辺に犯罪を起こした犯罪者が現れたとしても、彼らを極めて特異な存在として受け取り、福祉的な支援の対象から外してしまう。こうして障害者らは刑務所への「入口」へと向かうという。悲しいかなこれが今の日本の現状だ。私たちは障害者、そしてその福祉について考え直し、現状を改善しなければならない。生きていくうえで社会の闇にも目を向けねばならない。そう思われた一冊であった。

ジョン万次郎 海を渡ったサムライ魂 マーギー・プロイス、金原 瑞人 著

## サムライ魂

機械工学科2年 松林 悠汰

ホイットフィールド夫人の「世界を変える手助けをしない？」という言葉が、端的に世界というものを表していると思う。この言葉の通り、社会や世界といったマクロな視点に立った時、私たち人間は、その変革の手助けしかできない。言いかえれば、自分一人の力だけでは、何も変えられないのだ。しかし、その社会や世界をミクロな視点で顧みると、その社会や世界を形成しているのは、私たち一人ひとりの人間でしかないとはいえる。だから私一人の力では世界を変えられなくても、私たちが力を合わせれば、世界を変えるきっかけと成り得るともいえる。

ジョン万次郎は、価値観の違う異文化の社会を目の当たりにして、いろんなことに驚き、考え、感じ取ったことだろう。またそれは同じように、ジョンを取り巻く人々にも、異文化に育ったジョンの振る舞い、行動、言動が周りの人々を驚かせ、感動を与え、考えさせていったのではないだろうか。だからホイットフィールド夫人がジョンに声を掛けたことは、ジョン自身が人間として「自由と平等」を考え

るきっかけになったであろうし、またそれは、ホイットフィールド夫妻自身がジョンと出会い、そのことを確かめるきっかけとなったのであろう。お互いが惹き付けられていく関係がそこに存在していたのだ。ジョンを取り巻いてきた様々な境遇は、その惹きつけられていく関係によって、いろんな場面においても、彼は生き抜くことができたのである。

その生き抜く力とは、ジョンの強い執念である。ジョンは、日本に帰りたかった。ふるさとに帰りたかった。その執念が様々な境遇に立たされても、生き抜く原動力となり、周りとの関係を、惹き付けられていく関係として構築出来たのであろう。

そこまで彼を奮い立たせていく執念こそ、彼が育てられていく中で築き上げられてきたものでなかろうか。愛された人のもとに帰りたい思い。自分を産み育ててくれたところに帰りたいという執念である。

しかし、考えてみればジョン万次郎の話は、「浦島太郎」の話である。助けた亀につれられた訳でもないが、竜宮城ともいえるアメリカに行き、見るも珍しいものに触れ、まさに竜宮城で時を忘れ生活が出来たはずであるが、いつも「自分には帰るふるさどがある」、「ふるさとに帰りたい」という思いが彼を竜宮城で自らを見失わない眼を持つことができたのではないか。彼の思いが貫いていたことが、彼を日本まで連れ戻していったのである。

彼の人生を振り返ると、数奇な運命を生きた偉人として、時代と世界に翻弄されながらも生き抜いてきた人間ということがわかる。その人生は誰も真似出来るものでもない。その生き方の根底にある「生き抜く力」こそが、「サムライ魂」であったのだろう。

著書は、淡々と彼の生きざまを書き綴っていくが、その著者に響くジョン万次郎の「サムライ魂」こそ、ふるさとや母への強い思いと、そこに繋がっている熱い心であったのだ。

この「ふるさと」への強い思いを持つことの出来る人。帰る場所を持つことの出来る人が、一人では出来なくとも、その思いが繋がっていくことにより、世を変える力と成り得るのではなかろうか。

『西の魔女が死んだ』 梨木香歩 著

## 生きるための力

物質化学工学科2年 小谷 ひかる

「ニシノマジヨカラヒガシノマジヨヘ オバアチャンノタマシイ、ダッシュツ、ダイセイコウ」  
西の魔女こと主人公まいのおばあちゃんが死んだ



後にガラスに出てきたあであろうこの文字。私はこの言葉が一番心に残った。

死とは何か。そもそも私達はなぜ生きているのか。この本を読むまでも、私はよくそんなことを考えた。でもそのたびに答えは見つからず、死んでいくために生きているのかとさえ思った。生きていても勉強、会社、複雑な人間関係など、大きくなっていくにつれてしんどい、面倒くさいと思うようなものばかりが増えていきそうな気がして、あまり生に対して良い印象は持てなかったからだ。しかし逆に、死というものに対するイメージも私にとってぼやっとしたもので、悪いとも良いとも判断し難い、不思議なものでしかなかった。むしろ、「死んだら何もかも終わりだから希望を持って生きるんだ」と世間的に死ぬのはよくないことというように言われていることに対して、くさい、そんなこと本当に思える人なんているのかと、ちょっとひねくれた考えを抱いていた。しかしこの本を読んで、最初の言葉のように、死というのは魂が自由になることで、何もそこで終わるわけではないんだ。むしろ、魂が離れることで伝わったり、通じあったりすることができるんだという感じで、全体的に死が清々しく明るめに描かれていて、題名を読んだだけで身構えていた私は意表を突かれ、力が抜けた。こういう考え方もできるのかと、気分が晴れた。不思議なことに、死の話となると普通は暗く重くなるのが多いのに、まったく逆の気分になったのだ。この時私は、西の魔女の魔法にかかったのかもしれないと思ったと同時に、死に対する自分の中のイメージの変化に驚かされた。

また、おばあちゃん家に住んでいる間にまいの心が変化していったのも印象的だった。不規則な生活や今どきの面倒な学校生活で心を病んでいたまいが、おばあちゃんの魔女修行（主に、自分で決めて最後までやり遂げることを）を受けるのだが、はじめ、どれも単純で当たり前のことばかりだったので、こんなので変わるはずがないと思っていたけれど、まいの頑張りで意志や判断力などが培われ、強くなっていく姿をみていくうちに、簡単なことほど逆に実行するのは難しく、ちょっとしたことの積み重ねで人はすごく変化するんだと、この本から学ばせてもらった。また、何事もあきらめずにやろうと決めたことを最後までやりぬくことが、その人の気持ちをしっかりとたせ生きていく力にもつながるのだろうし、周りの人にも良い印象や影響を与えることができると思うので、その分運もついてくるのかなあと感じた。

「西の魔女」。この語をはじめ目にしたとき、ただのおばあちゃんなのになぜこのように言われているのだ

ろうかと、不思議だった。でも今なら少しわかるような気がする。実際に魔法を使えなくとも、まいだけじゃなく、こんなにも読み手の心をも動かし、それぞれに変化を与える力を持っているのだから。まるで魔法をかけたように。西の魔女と呼ばれる理由は、そういうことも含まれているのではないだろうか。このおばあちゃんの力は死んだ後もまいの心に残り、また次へ次へとリレーのように伝わり、消えないだろうと思う。私はこの本を読んで、改めて魔女のすごさを知ったと同時に、今までの、やることが中途半端な自分にも気がついた。これから目標をしっかり持ち、それに向かって必死に生きようと思う。

城 フランツ・カフカ 前田敬作 訳

## 権威に対してどう向き合うか

－「城」を読んで－

物質化学工学科3年 隅谷 大良

この本を読み終えた直後の印象は温かいものでした。物語にはたくさんの登場人物が出てきて、主人公と交流し、主人公を助けようと行動しているように思えたからです。しかし、よく読み返すと主人公は周囲のことが理解できず孤独なので、冷たい話だと思うようになりました。

フランツ・カフカの作品には「掟」というキーワードがよく出てくるそうです。この『城』という作品を読んでも確かにそう感じました。主人公は測量士のKで、ある城が統治する村へ雇われてきます。しかし仕事はありません。彼は城へ行こうとしますがたどり着けません。代わりに役立たずの助手をつけられます。Kは城と何とかして関わりを持つようと、長官に会うためにあらゆる手を尽くしますが、結局会うことはできません。そのままこの物語は終わってしまいます。私が注目したのは、Kが何度も城に敵対するようなことを行っていたことです。例えば、城の関係者しか泊まれない宿屋で夜をあかしたこと。別の、城に指定されたと思われる宿屋のおかみの忠告を、あれこれと理由をつけて受け入れなかったこと。城からつけられた助手を追い出したことなどです。故意にしてもそうでなかったにしても、Kは城の取り決めに逆らいました。

城はすべての掟の根源なので、社会的権威です。城の影響下にいることを受け入れ、城の決まりは越えられないということを認めている間は、普通の村人であることができます。反対に従わないならば、社会から疎外されることになり、実際にこの話には

村八分にされている家族が出てきます。この論議からすると、Kに仕事が無く長官に合ってもらえなかったのは、Kが掟を守らなかったからということになります。ところで、物語の終盤に出てくる場面で、Kにこの状況から抜け出すチャンスが訪れたのではないかと私は思います。城の役人はいつも厳格で事務的なのですが、Kが夜中に城の秘書の一人と話す場面で秘書は、夜は問題を個人的に考えがちだから苦手だ、相手の願いを叶えてやれずにはおれなくなる、と言ったのです。

私は、「城」という作品が何を伝えようとしているのかがなかなか分かりませんでした。今は、権威に対してどう向き合うかを伝えていて考えています。例えば学校では、学校側の規定した物事をその通りに行わなければなりません。なぜそう規定されているのか理由を理解していれば従い易くなりますが、いつも分かるとは限りません。Kの場合はそのとき、立ち向かってみて悪い事が起これば服従するという態度をとりました。他方、分からないからといって反抗すればどうせ悪い目に遭うのだから、盲

目的に服従するという事もできます。私は、どちらの態度も避けるべきだと思います。前者の場合は取り返しのつかない害を被るかも知れず、後者の場合はマインドコントロールにつながるからです。何としても理解に努めるしかないのです。分からないなら、秘書がくれたようなチャンスを使う、つまり権威に属する人に個人的に訊くべきなのです。Kはあの時、なぜ自分がこんな状況にあるのかを訊きさえすればよかったです、残念ながら眠ってしまいました。

この物語は断ち切られたように終わります。調べると未完だそうです。しかし、Kが態度を変えない限り、この先も城にたどり着くことはできないと思います。

## 図書館の利用にあたっての注意

### 図書館の本は大事に扱きましょう

時々、付箋が付いたままだったり、中に書き込みがしてあったりする専門書が返却されます。誰か他の人が貸してくれた本に、付箋を付けたまま返しますか？中に書き込みをしますか？図書館の本は、あくまで借り物です。皆の本です。そのことを分かったうえで利用してください。

### 図書館では静かにしましょう

小声で勉強を教え合うのは構いませんが、時々大きな私語や笑い声が聞こえます。しばらく続くようであれば、注意しに行きます。息抜きでちょっとお喋りしたい気持ちは分かります。でも、静かな館内に、貴方たちだけの声が響き渡っていませんか？貴方が一人で勉強している時、うるさくしている人たちに苛々したことはありませんか？一人一人が気を付けましょう。

### 返却期限を守ってください

期限内に読み切れなかった本（雑誌）は、他の人に予約されていなければ返却期限を延長することができます。手続きをせず、そのままズルズルと借り続けることはやめましょう。図書の延滞があると、新たな貸し出しはできません。